

神戸国際大学（神戸市東灘区向洋町中9）の学生でつくる「神戸国際大学防災救命クラブ（DPLS）」が救急法の普及を広める活動に取り組んでいる。心肺蘇生法や自動体外式除細動器

（AED）の使用といった救命方法を地域の子どもたちに伝え、少しでも多くの命が助かる社会を目指している。

（篠原拓真）

神戸国際大「防災救命クラブ」

救急法普及に尽力

同クラブは同大リハビリテーション学部が開設された2009年、自殺や親子が関与する殺人事件の報道を見た1期生8人が創部した。

現在の部員は1〜4年生79人。このうち29人が、救急法の指導に携わることができる応急手当普及員資格を取得している。同大での生涯教育講座のほか、東灘区内の中学校や高校、ボイススクウトでも出張指導を行う。

「肘は曲げずに、1分間に100〜120回のペースで。胸が沈む深さは電池1個分が目安」。模擬人形を使って胸部を両手で圧迫する心臓マッサージでは、単3電池を実際に示しながら学生が説明する。

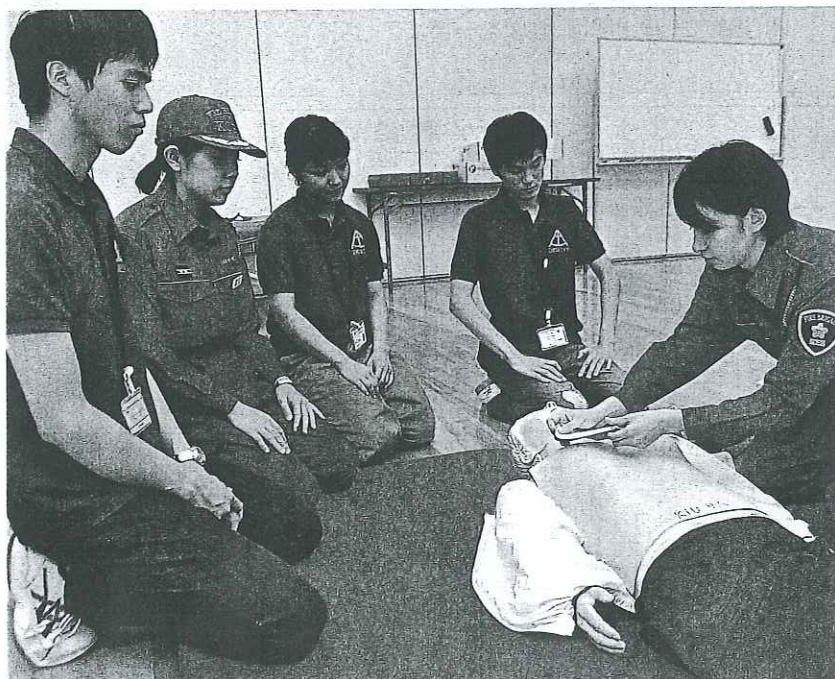
中学生や高校生の中には話を集中して聞かない生徒もあり、副部長で3年生の長渡咲季さん(21)も「なかなか教えるのに苦労する」と苦笑い。それでも「人が倒れる場面に出くわす可能性は誰にでもある。いざという時や災害時に動けるためにも、面白く伝えることを心掛けています」と話す。

また、部員は出張講座以外に防災にも活動を広げている。大学の

資格取得、学校などで指導も

ある六甲アイランド内の消防団には一部の学生が入団し、水門の閉鎖なども体験する。学内では災害を想定し負傷した学生や市民を運び出す訓練も行う。

部長で3年生の西村大樹さん(21)は「地域と連携を深め、この部が地域防災の中心を担うようにしたい」と話している。



倒れている人への処置方法を練習する学生ら＝神戸国際大学